

## お祭りドクトリン

『現代社会資本論』有斐閣の拙稿コラムで「お祭り型公共投資」をとりあげた。1964年東京五輪、70年大阪万博を例にして、国家イベントに便乗した社会資本整備であり、特定の空間に公共投資を集中し、都市開発などを加速させること。「過大需要予測」により公共投資が大盤振る舞いされ、地元自治体の負担を累積的に膨張させることが多い、などと指摘した。

吉見俊哉『東京復興ならず』のなかで、「お祭り型公共投資」に関わり、東京五輪という「お祭りドクトリン」に注目したので紹介したい。

東京から路面電車が一扫されていく決定的なモメントとして、東京オリンピック開催が作用していたことが見て取れる。ナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン』になぞらえれば、戦後日本の政治では、一貫して「お祭りドクトリン」が作動してきた。1964年の東京五輪や70年の大阪万博は、このお祭りドクトリンがあらゆる面で作動した顕著な事例である。

戦災復興計画で上野・本郷一帯の構想を丹下健三とともに練っていた高山栄華は、後に磯崎新による聞き取りで、日本の都市計画を貫くこのお祭り主義をこう評していた。

日本人はそういうこと(お祭り)がないと予算も力も出さないから一ということば、ぼく、どっかに書いたんだよ。そういうものは地域開発のひとつの手段としてはいいんだけど、こういう手段だけじゃないとモノはできない、というのはまずい。だから生活環境なんか遅れちゃうわけだね。……(日本の地域開発は)プラスアルファばかりになっちゃって(笑)、基盤になっているのは、逆にいうと、ほかの基盤を薄めこそすれ、基盤じゃないもののほうへ総予算がいつちゃうという、そういう仕組みになっているわけだ。しかし、そのぐらい結集しないと結局何もできないということなんだ、日本人というのは。政府も。(『都市住宅』第102号、1976年)

つまり、大規模な公共用地の取得とインフラ整備の予算を引き出す日本的政治技術が、この国独特の「お祭り」であった。戦後日本人は、かつて「軍」の決定を錦の御旗としたのと同じように、「五輪」や「万博」、あるいは「国体」や「地方博」のような「お祭り」を錦の御旗とすることで開発を断行してきた。

そしてこのお祭りドクトリンは、既存のインフラや仕組みが廃止されていく際にも有効に機能した。とりわけ、1964年の東京オリンピックが目指した「速い東京」のために犠牲にされたのは、「ゆったりとした東京」だった。オリンピックに向けて高速道路建設や道路拡幅、そして自動車交通への一元化に邁進する運輸省と建設省は、前者は公共交通の管理、後者は道路建設と狙いは異なっていたのだが、路面電車を路上から放逐することでは一致していたのである。

(2021年9月21日)